

椿は春の木

柳田 國男

椿は春の木

一

今晚は旅行の話をいたします。ただいまごろ盛んに雪が降っております日本海の海岸には、東京より西の方の人には、ちよつと想像のできないかわった風景があります。そうしてあの方面は全体に旅をする人が少ないゆえに、わずかな土地の者か、または昔風の小さな船で陸近く航海する者のほかは、まだ知っておらぬ人が多いので

あります。めずらしい話はいろいろありますが、その中で一つ、椿は木へんに春と書きますから、お正月にちなんで今晚はその話をいたします。

北緯四十度以北と申しますと、檜の木も真竹も成長せず、薩摩諸も裸麦も作れない土地となっていていますが、不思議に椿だけは処々の海岸に、森をなして繁茂しているのであります。太平洋の海ばたにもあるかと思いますが、私はまだ心づいておりません。宮城県本吉郡の椿島、唐桑の半島の権現社などは、まだその線よりも少しは南になります。日本海に面した方でも、古くから有名なのは

由利郡の三崎阪、山形と秋田とのちょうど県堺で、これは北緯三十九度四十分一になっております。女鹿めがの関と申しまして、旧道は路の両側がみな椿でありました。そこから海に向って突出した山が三崎山で、慈覚大師の旧跡と称し、あの地方の信仰の一つの中心でありました。その次は南秋田郡で、男鹿おが半島の南磯に椿浦、花の頃は朝日夕日に映じ、海の波も紅に染まったといいますが、私が見ましたのはただ二本か三本になっております。これが北緯三十九度五十何分の地点であります。それからいよいよ四十度以北となって、青森県の境に近く、また

一つの椿という村があります。ひところ非常に栄えた椿鉾山の所在地で、これも村の名になったほどの椿が、近年はほとんど無くなりかけております。

二

その次には奥州に入つて、西津軽郡の深浦という古い港の、外囲いになっているヘナシ崎も、椿が多いので椿山と呼ばれております。この山のことは後に申しますがこの三か所四か所の椿の群生地は、いずれもその間隔が

十里以上ずつもあり、近くには同じような光景が無いゆえに、土地の人たちにも非常にめずらしがられていたのであります。

最後に今一つ北へ進んで、青森湾の底になる小湊半島の東側、椿明神のお宮の山、これはあたかも四十一度の線の上に在って、また一つの大規模なる椿崎であります。もちろんこの土地が特別に暖かく、風を避け日光をよく受けているほかに、地味とか潮の流れとかいう、まだ調査せられぬ原因があることと思えますが、これをこの植物の自然生の北限と認めて、天然記念物として内務省が

保存を命じておりますのは、目的は至極よろしいが実は理由が心もとないのであります。くわしく考えてみたら、事によると史蹟記念物であるかも知れないのであります。

北半球が今よりもずっと暖かかった大昔に、この東北一帯に樅の野生があつて、それがここだけに残つたということは、少しく想像がしにくいようであります。なんとなれば今日まだ温かい西南の方でも、樅は人間の保護なしには、そうたくさんには野生しておりません。庭樹でないまでも里の木であります。またお社の森の木であ

ります。鳥が椿の実を嘴にくわえて運ぶにしましても、もともと食べるためにくわえて行くのですから、そう遠方まで持って行きません。ゆえに私は人が持って行ったものではないかと、考えているのであります。

日本人が追い追いと千何百年の間に、雪の深い国に移住して行く際に、何と何とを携えて往ったかは、実は今日までこれを考えてみた人がないのであります。少なくてとも武器と農具と作物の種子とだけでなかつたことは確かであります。私は椿の実、もしくは椿の小枝も、最初その一つであつたのではないかと思ひます。もとより

こんなものを移そうとすれば、十のうちの九つは失敗したでしょう。しかし民族の計画はくりかえされます。成功するまでは続けて試みられます。殊に日本人はそうでなかつたかと思ひます。

三十年あまり前までは、米は北海道に栽培して引合つか否かが激論せられておりました。しかも今日では旭川の盆地は米産地となり、樺太にもまた黒竜江の岸にも、安心して田植をする者ができてきました。ただ今日の人には、もう椿なんかを栽^うえてみようとせぬだけであります。

大雪の中の椿山、これが北日本の日本人の、ひとり鑑

賞し得た風景の一つであります。雪がたちまち霽れて空が青くなりますと、この木の雪だけが滑ってまず落ちて、日がてらてらとその緑の葉を照します。それが南から来た移住民にとって、なつかしい嬉しい色であったことは想像ができません。それゆえにところどころの椿崎椿山には、必ず神を祭ってあったのかと思います。伊豆や紀州では、冬中から椿は咲いておりますが、津軽では旧四月の八日をもって、椿の花盛りとしておりました。卯月八日はお釈迦様の誕生であるほかに、日本ではまたこれを夏の誕生する日として、いずれの地方でもこの日山に登

り、山の花を折ってかえりました。つまりはこの日に鑑賞し得るように、山に椿の木の繁茂することを願ったので、実際は奥羽の果とても、旧三月中ごろ雪が降り止みますと、もうそろそろ椿の花は咲きはじめます。そうして花の盛りが長かったのであります。小湊の椿山は、花の盛りには緑と紅とがもりあがったように見えて、それが日に照り水に映る風情は、すばらしいものだど土地の人もよく語り、また稀には書物にも書き伝えております。

この青森湾内の椿山については伝説があります。昔この湊に往復して、木材を西へ運んでいた船の船頭が、この土地の婦人と馴染になっておりました。ある年の出船の別れの日、その女が申すには、あなたのお国では椿の実の油を用いるゆえに、女の髪がいつまでも黒くつやつやとしているということを聞いてうらやましいと思います。どうか来年はその椿の実を持ってきて私にください。いといたたそうであります。船頭は快く承知して約束を

しましたが、何か故障があつて次の年も、又その次の年も津軽には来ませんでした。三年目の同じころに、約束の椿の実を船に積んで、男は小湊へやってきたのであります。もうその時には待ちかねて疑いかつ恨んで、海に身を投げて女は死んでしまつていたと申します。そこでこの岬の山にあつた女の墓に参つてきて、その椿の実を墓のまわりに播き散らして往つたのが、後にこれだけの椿の森になったのだと伝えております。だからこの椿は一枝も折って行くことを許されませぬ。心ない者がこれを採ろうとすると、必ず美しい女性が現われて制止す

るともいっておりました。そうして今日椿明神ととなえて、この山に祭つてあるのがその婦人の霊であるらしく、申す者もあつたのであります。小湊の町から海づたいに、椿明神へ参詣する路には、穴沢と申す処があつて、そこにも一本の古い椿の木がありました。これも昔誰とかが枝を盗んでかえろうとすると、海が荒れてなんとしても先へ進むことができない。それで怖ろしくなつて途の傍に棄てたのが、根づいて成長してこの木になつたという説がございます。

男鹿半島の椿浦でも、今日はもう村の名だけになろう

としておりますが、村のまん中にわずかな小山があつてこれを中山といい、その麓には美しい清水があります。椿はこの中山だけに茂っていましたので、ここにはまた女の神が祀まつられてありました。古い石碑もあるそうです。が、登れば暴風雨があるという信仰から、元は旅人の近づくことを厳禁しておりました。いわんや椿の枝など、手も触れさせなかつたので、すなわち最初はとにかく、少なくともその保存だけは人の力だったので、もしも天然記念物と呼ぶならば、それは人間の心をもひきくるめての「天然」であつたのです。それゆえに今後もただめ

ずらしがるだけでは、保存をしてもなお古くからの心持はなくなるかも知れぬと思います。

四

津軽深浦の椿山のごときも、折ればヘナシ権現の神罰があるといっておりますが、やはり少しづつは採って行くえせ風流人があつたようであります。その上にちよつとわれわれには想像の及ばない害敵がありました。これは今から百五六十一年前の事実談ですが、ある年特別に

雪の深かった冬のうちに、男鹿の半島から多くの鹿の群れが渡ってきて、すっかりこの樅の林を喰い荒して、老木の数はただわずかになり、今は芽ばえの若木ばかり多いと、菅江真澄という旅人の紀行には誌しております。

秋田の男鹿は日本海岸では、最も鹿のたくさんいる半島でありましたが、そこと深浦との間は二十里以上もあり、又その中間の山には野獣はいくらもいたのです。それをただ鹿が南の方から、または海辺づたいに来たというだけ、ただちに男鹿半島からと断定したのには、何か隠れたる理由があるらしいのであります。

もつともみなさんが奈良の公園に往って見られてもわかるように、鹿はなかなか樹木を害するもので、青いものが足りなければ樹の皮でもかじりますから、ああして松や杉の幹まで竹の簀すで巻くのであります。殊に山奥に雪が高くなると、うろついて里に出てくることも事実です。これも男鹿と深浦との間の海岸でのお話であります。が、浜田という村の岩堂の不動尊などは、ある年何匹かの鹿が、雪に降りこめられてこの岩屋の中にいた時に、その木像をすっかりかじってしまった。行基菩薩か誰かの名作が鹿に食べられてもう形もわからぬようにな

っていたと、やはり同じ旅人の日記の中に書いてあります。男鹿の椿浦などは、人家に取り囲まれた離れ山だから、相当の保護はできたわけですが、鹿と椿と、天然と信仰とは、しばしばこういう形式をもつて、相誘い相傷つけまたは相結んで、そのよいくらいなバランスの取れた点を、われわれが風景と名づけているのであります。生物学者が自分らだけの側面から、これを天然記念物などと呼ぶのは少しばかり物知らずな話であります。

五

そんなら誰がいつのころ、椿の挿枝などを東北へ運んできたか。言ってみよという人があるかも知れませぬ。こんな詰問に対しては、単に「昔、日本人が運んできた」と、答えておいてもたくさんなのですが、私たちの仲間では、これからだんだんと考えて行ったら、もう少し詳しいことがわかると思っております。それにはまず二つの点、すなわち椿を愛する人情の変化と、椿を大切にされた階級の盛衰とを、考えてみなければならぬと思います。

ただいまのところでは、ほんの想像というまでですが、
どうもその運搬者は婦人であつたらしく思われます。東
北にはイタコ・モリコまたはワカなどと申しまして、盲
の女の宗教家が今でもおられます。この人たちの大切にす
る木は、紫桑といつて、伐つて人形を造る一種の桑の木
もあります。また椿の木で造つた才槌なども重きを置
かれております。椿の木の槌を縁の下に隠してぶら下げ
ておいたら、彼らの占いや口寄せが少しも中らあたなくなる
という話もありました。またその椿の槌はよく化けると
もいつて、いろいろの口碑があります。古木の朽ち株な

どの夜光るといふものは、榎の木か椎の木か椿の木かにきまっています。これも狭い意味の自然科学だけでは、説明しがたいことと私は思っております。椿は山中には絶対にないというほどではありませんが、それが林をなしている処には、必ず人の意思が加わっています。何か伝説があるゆえに、そう信じてよいというのではありません。通例はその他に今でも社がありお堂があるからそう考えるのであります。一軒の家の屋敷内でも、ただ漫然と栽えたものは少ないのであります。

殊に日本海に面した寒い国々、たとえば越中能登など

の椿原は、若狭の八百比丘尼という非常に長命の婦人が、廻国してきて栽えたという話になっているものが少なくありません。この尼は東北は会津、西は中国から四国までに無数の遺跡がありました。実際話のとおりうそ八百年も長生きしたのでなければ、とうていこれだけの大旅行はできないわけにあります。つまり何かの間違いでありましょうが、これに関しての各地共通の言い伝えの一つには、木を持ってきて宮や寺の前に栽えて行ったという話があります。その木には杉もあり、また銀杏もあります。若狭の小浜の木元の寺にある比丘尼の木像は、

手に白玉椿の小枝を持っているのであります。信仰を持ち運ぶこの類の女旅人は、丹念に処々に実を播き枝を括し、それが時あつて風土に合して成長するのを見て、神霊の意を卜ほくする風ふうがあつたかと思われまゝ。柳や桜もこの目的に用いられたという例はたくさんありますが、北の雪国に向つては、あるいは椿が最も適していたのではありますまいか。それというのもこの木が霜雪を耐え忍んで、春の歓びを伝えることに鋭敏であつたためで、上代の朝廷が正月の卯杖うづえ卯槌うづちには、必ず椿の木をお用いなされたのも、またこの植物の名前に木篇に春という字を

与えられたのも、けっしてでたらめでも思いちがえでもなかつたろうと思います。ツバキの本当の漢名は山茶または海石榴だそうですが、椿という字はすでに『万葉集』の中にも用いられています。ハギを草冠に秋と書くのと同じく、多分は飛鳥朝廷の御代に御制定なされた新字というものの一つで、椿を随一の春の木と認むべき理由は、あの頃には今よりももっと明白であったのかと思います。

日本文学電子図書館

椿は春の木

著 者：柳田國男

制作者：宮澤一郎

底 本：「現代日本思想大系29 柳田国男」
筑摩書房

1965年 7月20日 初版第 1刷発行

1973年11月20日 初版第12刷発行

日本文学電子図書館